

たぐみ

Craftsmanship

特集 みちのくの手仕事 つがる民藝展 第12号

地方民藝の再生と民藝運動

信州松本の市立博物館で、いま「民藝ルネッサンス―信州の民藝を担った人々―」という特別展が開かれている。

そこは市の中央、松本城天守閣に隣接し北アルプスの山々を眺望する景勝の地にあるが、何よりも伝統に根ざした新作民藝品の生産地としての、絶え間ない努力とその成果が、数多くの作品によってわかり易く展示されていて心地よい。

この展覧会は日本民藝協会の全国大会を協賛して催されたものだが、柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司たちによってはじめられた民藝運動が、いかに全国各地に現代生活に生きた新作民藝の種を撒き、育ててきたかがわかる。

「みすず刈る信濃の国」と万葉集にも詠われたように、古くからすす竹細工があり、地の繭まゆによる信州紬の着尺や、豊かな木材を背景に松本帖箋笥や

卓袱ちやぶくだい台が作られ、木曾や松本の漆器や桶樽、開田の麻布、それに村や町の紺屋の仕事など、地の利の不便な土地柄にあつてこそ残された手仕事は多い。

それが昭和二十年代、民藝運動のリーダーたちとの結縁によって今に生きた地場産業として甦り、松本もまた民藝のふるさととして親しまれるようになった。柳やバーナード・リーチらの良き指導を受けて、現代の和洋家具としての高い評価を受けた松本民藝家具などそのよい例であろう。

柳たちの運動に心を寄せ、身を投じ協力を惜しまなかった信州の人は多い。そのような例はもとより日本各地であったが、青森の相馬貞三もその一人であった。相馬の一生をかけた仕事は、地元とりわけ弘前での民藝運動の啓蒙、土地で作られる民藝品の発掘と育成、普及であった。その足跡の一端は昨年八月の青森での全国大会で展覧され感銘を与えたことも併せて記したい。

(志賀直邦)



抱えバック二種 ブドウ（前）とマダ皮



こぎん刺テーブルセンター



竹細工 手付椀かご



絵馬

たくみ企画展
みちのくの手仕事 つがる民藝展

会 期 平成十六年六月二十六日（土）～七月三日（土）
六月二十七日（日）は営業いたしません。
会 場 銀座たくみ 二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで
日曜日と最終日は十七時三十分まで

つがる民藝展開催にあたって

會田秀明

東京の諸国民藝銀座たくみで、つがる民藝展を開催することは有難いこと

ではあるがいささかの不安もある。それは今、青森県で作られているもの、また私たちがかわって製作している民藝品が東京でどう受け入れられるか

気がかりだからである。

つがる工芸店は故相馬貞三（初代青森県民藝協会会長）が昭和二十四年に弘前市の土手町に開き、山道町に移転して平成元年、本人が亡くなるまで四十年間続いた店である。



鳩笛



あけび細工 マガジンラック

その間、つがる工芸店は民藝品の販売、製作の拠点として信用を受けてきた。現在の顧客の中にもその当時からの方々がおり、また、たまたま森町の現在の店に来られる方にも「相馬さんがやっていた山道町のお店が続いているのですか」といわれたりする。

相馬が亡くなってからいったん店を閉じたがお客様の要望で平成三年に二月に一回（四月から十二月まで）の定例販売会を中心とした店として再開した。その後十三年を経た。

相馬がプロデュースしていた民藝品のうち、津軽こぎん刺し、南部菱刺し、津軽ガラス、津軽風絵、金魚ねぶたなどは今も続けて製作している。これらは作り手をさがしたり、材料の手配も含めて大変な仕事であることが分かった。

製作品は日本民藝館展やその他の展覧会で何回か賞をいただいたので製作している人ともども励みになっている。

青森から離れて他県に行ってみると

青森県に残っている民藝品の多さ、質の高さを知らされ仕合せな気がする。

しかし同時にそれを守って行く責任も感じる。作り手が亡くなって作れなくなったり、一方、個人作家になり、値が高くなったりしているものも多いか

らである。

地元のを地元で消費する地産地消という運動もあるが、青森県の民藝品を他県の方が使って下さることは大変有難いことである。

今回、たくみで行う展示販売会はその意味で大切な催しと思っている。青

森県産品の特徴のあるものを出品するように務めた。

この展覧会により青森県で作られ続けている民藝品について、ご理解をいただければ幸いである。

(つがる工芸店主宰)

真摯の人・相馬貞三さんのこと

志賀直邦

「先生だなんて呼ばないで下さい。私は先生なんかじゃないんですから……」

昭和五十五年(一九八〇)の頃だったろうか。相馬貞三さんから、私はきびしく言われたことがあった。「そんなことを言われても、学校で教師をされていたことがあったでしょう。戦前、昭和十五年の民藝協会と沖縄学務部との有名な方言論争の時、相馬さんは教

育者の立場から、方言を肯定する論稿を『月刊民藝』に書かれているではありませんか」

「ああ、あれはネ、書けないというのに、柳先生に無理やり書かされたのですよ」

この時、日本民藝協会は沖縄の工藝と文化の再評価のための調査に総力をあげて取り組み、同人多数が渡琉して

いた。そのメンバーは柳宗悦、濱田庄司、式場隆三郎、保田與重郎はじめ後に有名となった棟方志功、土門拳ら若手も含めて総勢二十六名を数えた。

第二次世界大戦への本格的な参入を控えて、国と県当局は、沖縄県民への皇民化教育を徹底すべく、方言禁止を軸として、地方固有の文化を中央に同化する政策を強めていた。

このことは当然、古歌謡集「おもろさうし」や工藝など、沖縄独特の伝統文化を賞賛し保存しようとする民藝協会の立場と対立し、新聞、雑誌における方言論争に発展したのであった。



ありし日の相馬貞三さん（昭和60年）

この時相馬さんは『月刊民藝』三月号に「沖縄の美しき魂達に捧ぐ」と題して次のように書いている。「すべての言語はそれに相応する文化と生活内容をもっているものであって、上からの強制によって否定されるべきではない。標準的な国語もまた、それら個性ある地方文化と方言の上にこそ成り立つも

のではないだろうか」

このような見解はもとより民藝同人の共通の認識であったに違いないが、同誌に論稿を寄せた他の六名、長谷川如是閑、柳田国男、河井寛次郎、寿岳文章、保田興重郎、萩原朔太郎らの文に比べても、相馬さんの文章は何ら引けをとらない内容であった。

相馬さんの語るところによると、彼は柳先生から一度も相馬！とか相馬君！とか言われたことがなかったという。文化学院在学中の二十二歳の時に、柳を初めて訪ねて以来、柳はいつでも彼に対して「相馬さん」と呼んだという。相馬さんはそれが口惜しくてならなかったと晩年になっても語っておられた。鈴木繁男、岡村吉右衛門はじめ、自分よりも五歳年長の棟方さんまでが、敬称抜き呼び捨てで声をかけられるのがうらやましくてならなかった。

昭和九年、全国の民藝調査の旅の途中、二十六歳になった相馬青年の、南

津軽郡竹館村の実家を訪ねた柳宗悦は、彼の暮しぶりに大きな興味を示したという。それは相馬さんの蔵書の中に占める哲学書、とりわけ佛典についてであった。

のちに柳は、連日の空襲を避けて地方に疎開先を求めた昭和二十年夏、相馬家をその候補にあげた理由の一つに、相馬さんの所ならば書物を持つていく必要がないから、と語っている。

柳先生が相馬さんに対して、終生変らぬ親愛感をもっておられたのはどうしてだろうか、と私はよく考えるのである。それは何よりも冒頭で書いた飾ることのない謙虚さ、真実を求める強さ、師に順ずることのできる潔さを相馬さんに見たからであろう。そして更に柳が生前ある人に語ったという、美と宗教における真理の一致を深く理解しえた、数少ない同志の一人として相馬を擬したのではないかとも思う。

〈秩父からのたより〉

古民家移築再生事業のこと(五)

山下 治

大工さんの仕事も階段が終わり、日々細部に渡ってきた。本棚やキッチン、洗面所、トイレの棚等々。階段は、玄関に入ると正面突き当りになる、一番

目立つところなので箱階段にした。大工さんの腕の見せ所です。手摺りは天井の燻し竹を使い、同じく燻しの細竹は欄間や天井に使った。



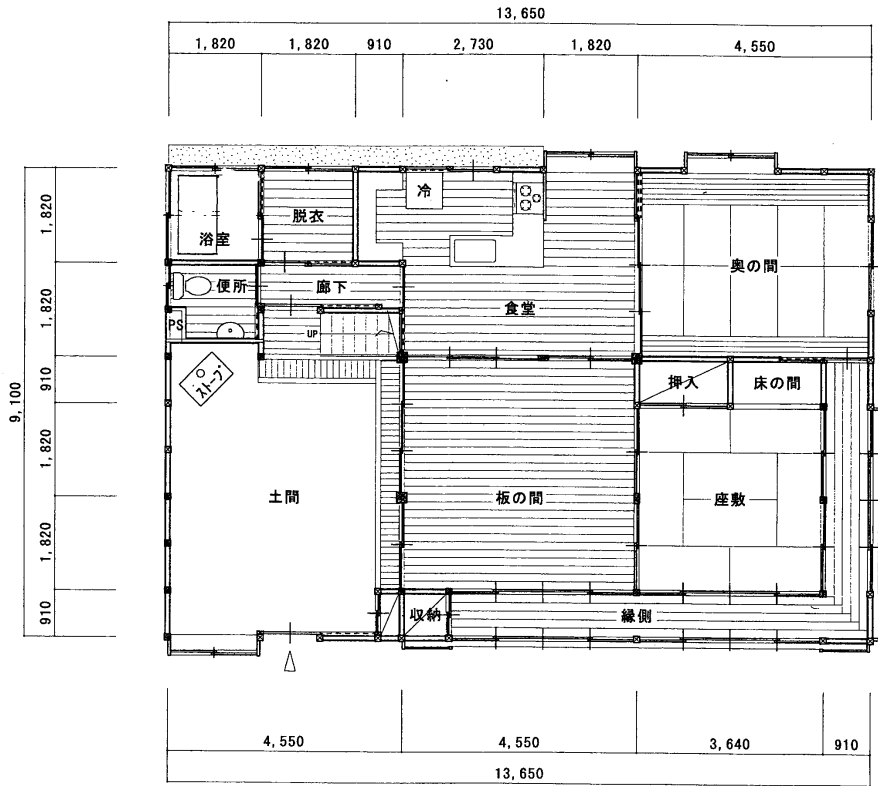
一階 板の間の天井

台所は、システムキッチンなどは入れず、特注で流し台とガス台を設置した。市内に工業用のキッチン設備を作る会社が有り、工務所はいつもここで製作してもらうとの事。厚いステンレスの立派な流しで、台は大工さんが合せて作る、私共の依頼通りのものが出た。大工さんの仕事は、四月中旬に終わった。道具などを持ち出し、整理するのを見ていると何か寂しくなった。長い間ご苦労様でした。この間建具屋さん、古い建具を持って行っては手直しをし持って来る、建物の外廻りは、

玄関扉が最後に入った。旧家の蔵の内戸を利用した、上部が千本格子で樺の堂々とした玄関戸となった。

又、この家は元々平屋であったため、上部からの明り取りが少ない。今回一階廊下の上部に格子窓を作った、外から見ると丁度虫籠窓風に見える。玄関土間の上部には、娘が京都で入手したオールヌーボー風のステンドガラスを入れた。おとなしい絵柄でこの家に合っている。

さて、建具屋さんも息子さんと二人で来る、この仕事は、技術の他にセンスが物を言う、若い力で良い後継となることと思っている。一方、我家は古い建具をそのまま使うため、新規に作るものは少ない。ただ、正面廊下部分のみガラス戸を新調する、デザインは持ち帰った旧家のもと同じにした。板戸や格子戸、ガラス入りの障子等々、建具が入ると部屋もそれぞれの表情を見せるだろう。



一階平面図 124.21 m² (37.5 坪)

次は左官屋さんの仕事が残るのみ、古材と壁との接着面へ柿渋塗りが急がしくなった。古材へ壁を塗る場合、水分を含む壁材は古材の煤の黒さを吸い出して、白漆喰を黒くしてしまう。柿渋は防水効果もあるため、壁と接着面へ塗る事にした。キシラデコールのような浸透性のある塗料でもよいようだ。すべてが真壁のため、塗り残しのないように気を使った。左官屋さんは、一度四月に戸袋を作るため、外壁の下塗りに来ていた。五月に入り、いよいよ本格的に仕事が始まる。壁はほとんど白漆喰であるが、和室を藁入りの京壁、トイレを珪藻土とする。全体として白壁に黒い古材が映える、特に二階は、太い梁が手に届く所に有り、迫力を増した。壁塗りは、前日に下塗り、中塗り、次の日に上塗りのため、一面仕上げするのに二日かかる。三日ほどで硬化し、二週間で乾くとの事、三人の職人が連日頑張っている。我家は、吹き抜



玄関正面

けが多いため、足場作りが大変のよう
だ、一階へ下りて来て、やっと安心し
て仕事が出来ると喜んでいた。

玄関土間は約八坪、三和土にしよう
か、テラコッタ、瓦、板張り等々、結
局大谷石となった。五月六日に、宇都
宮の石屋さんから届いた石は、青いサ
ビ色で、普段見馴れている大谷石とは

色が全然違う、あわてて問い合わせる。
山から切り出したばかりの石は、そう
いう色で、これから空気に触れ、酸化
され、一般的な白に茶まじりの大谷石
となるとの事。あまりあわてず、ゆっ
くりと色が変わってから敷こうと思う。
壁が済めば畳、建具、水廻りの仕上げ、
最後に照明ですべてが終わる。昨年五
月二十八日の解体から一年、休む間の
ない日々であった。この一年あまり友
人達とも会わず、自宅と現場の往復の
みで過して来た。改めて、新潟の多く
の方々のご協力で家が見つかり、持主
の小林家のご配慮、大野工務所のご理
解とご尽力等に感謝し、この家での暮
らしを大切にしなければ、という思い
を強くしている。

たぐみの皆様にも心より御礼申し上
げます。ありがとうございました。

終

あとがき

秩父の山下治さんの「古民家移築再
生事業のこと」が完結した。山下さん
の文章にもあるように、元の民家の持
主の方の配慮、工務店など職人さんの
理解と尽力、そして何よりも施主山下
家の皆さんの一年余りにわたる日夜の
奮闘が完成へと導いたのであろう。

いま、暮して愉しく、身体に優しく、
そして丈夫で長持ちするという、本来
の日本の家屋の良さが見直されている。
古民家の移築はなかなか難しいが、
しかし山下さんの経験は普通の家づく
りにも生かせることが多いのではない
かと思う。なお完成後の写真や二階の
平面図など割愛した資料も多く、お詫
びするとともに、五回にわたる連載に
御礼を申し上げます。(S)

発行 株式会社たぐみ

東京都中央区銀座八四一

二 発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)